

目 次

はじめに——本書のねらい

第1部 共生とはなにか

第1章 共生と希望の教育学へ 田中統治

- 1.1 はじめに——共生を強制するなって? 5
- 1.2 マナーで考える共生と希望の教育——身につけないと大変なことになる? 6
- 1.3 スウェーデンの「共生」の教育課程——北欧型福祉社会の「共生脳」の育て方? 9
- 1.4 共生と希望の教育学に向けて——社会科学的な思考と実践なのか? 12

第2章 ユネスコにみる教育理念——共生の教育へ 嶺井明子

- 2.1 はじめに——人類の知的及び精神的連帯による平和の構築 16
- 2.2 ユネスコの設立とユネスコ憲章、日本国憲法 17
- 2.3 ユネスコ提唱の教育理念——教育の力に希望を託して 18
- 2.4 21世紀の新たな学習課題 26
- 2.5 おわりに 28

第3章 個人化社会で要請される〈共に生きる力〉 岡本智周

- 3.1 〈共に生きる力〉の由来 30
- 3.2 1990年代における共生概念の変容 33
- 3.3 社会化の“行き先”の多屬性 34
- 3.4 社会的カテゴリの更新としての「共生」 38

第4章 忘れられた「共生」の語り

——〈植民地帝国日本〉というミッシング・リンク 平田論治

- 4.1 プラスチック・ワードとしての「共生」——問うべきはなにか 42
- 4.2 「植民政策上の共生主義を論ず」——いかに語られたか 45
- 4.3 「共生」の歴史的射程——なぜ語られたか 48
- 4.4 結び——どうみるか／どうするか 51

第5章 共生は希望を語れるか

——国際教育開発からの参照

橋本憲幸

5.1	はじめに——共生を再審する	56
5.2	共生の思想内容——共生は目標ではなく過程である	57
5.3	国際教育開発の状況——過程ははじまり、そして、おわる	60
5.4	共生の思想課題——共生は目標ではなく過程である、か	63
5.5	おわりに——共生は希望を語れるか	66

第2部 人と人がつむぐ共生

第6章 人間関係の構築と「共生」の実現

庄司一子

6.1	人間関係論	74
6.2	現代社会における人間関係	76
6.3	共生に向かう人間関係を構築するには——人間関係における共生のプロセス	81

第7章 「共生」に向けた教師 - 生徒関係の捉え直し

中井大介

7.1	教師 - 生徒関係における「リスク」とは	86
7.2	教師 - 生徒関係における「リスク」発生のメカニズム	87
7.3	従来の教師 - 生徒関係の「捉え直し」の必要性	90
7.4	「信頼感」とは	91
7.5	生徒の教師に対する信頼感の「因子構造」とその「規定要因」	92
7.6	今後の「教師と生徒の共生」のあり方	94

第8章 罪悪感が媒介する共生の姿

今岡多恵

8.1	児童生徒をめぐる問題	99
8.2	人と人との関わりにおける共生	99
8.3	罪悪感を媒介させた共生プロセス	101
8.4	人と人との関わりにおける共生プロセスの可能性	106

第9章 「聴覚障害児」の統合教育現場における共生

羽田野真帆

9.1	障害児教育における「共生」	109
9.2	統合教育現場における「聴覚障害児」と「聴児」の関係性	112
9.3	統合教育現場の共生における課題	118

第15章 イギリス高等教育における合理的配慮と共生	麦倉泰子
15.1 教育へのアクセス	182
15.2 日本の高等教育機関における障害学生支援	182
15.3 イギリスの高等教育における障害学生支援システム	185
15.4 合理的配慮の内容	186
15.5 ダイレクト・ペイメントによる個人の裁量	188
15.6 紛争解決	190
15.7 結び	191

第4部 社会との連帯、社会の連帯

第16章 学校・地域関係の変容と再構築に向けた課題	浜田博文
16.1 はじめに	200
16.2 「地域」とは何か？	201
16.3 学校・地域関係における多様化の進展	203
16.4 学校ガバナンス改革の進行	205
16.5 学校・地域関係の再構築の課題	208
16.6 おわりに	212

第17章 フィールドワークを通じた地域との連携	井田仁康
17.1 フィールドワークで地域を理解する——百聞は一見にしかず	214
17.2 初期社会科でみられたフィールドワークと地域への提言——「村の五年生」の実践	216
17.3 フィールドワークはどのように実施されるのか	219
17.4 フィールドワークにおける地域との連携の鍵	221
17.5 課題解決へ向けた地域との連携	223

第18章 市民のネットワーク活動と共生の社会づくり	飯田浩之
18.1 地域における子育てとその支援	226
18.2 アクション・リサーチ「子育て支援ネットワークの構築・運営」	230
18.3 ネットワークの構築・運営を支える実践知	233
18.4 子育て支援ネットワーク活動の中の「共生の社会づくり」	235

第15章	イギリス高等教育における合理的配慮と共生	麦倉泰子
15.1	教育へのアクセス	182
15.2	日本の高等教育機関における障害学生支援	182
15.3	イギリスの高等教育における障害学生支援システム	185
15.4	合理的配慮の内容	186
15.5	ダイレクト・ペイメントによる個人の裁量	188
15.6	紛争解決	190
15.7	結び	191
第4部	社会との連帯、社会の連帯	
第16章	学校・地域関係の変容と再構築に向けた課題	浜田博文
16.1	はじめに	200
16.2	「地域」とは何か？	201
16.3	学校・地域関係における多様化の進展	203
16.4	学校ガバナンス改革の進行	205
16.5	学校・地域関係の再構築の課題	208
16.6	おわりに	212
第17章	フィールドワークを通じた地域との連携	井田仁康
17.1	フィールドワークで地域を理解する——百聞は一見にしかず	214
17.2	初期社会科でみられたフィールドワークと地域への提言——「村の五年生」の実践	216
17.3	フィールドワークはどのように実施されるのか	219
17.4	フィールドワークにおける地域との連携の鍵	221
17.5	課題解決へ向けた地域との連携	223
第18章	市民のネットワーク活動と共生の社会づくり	飯田浩之
18.1	地域における子育てとその支援	226
18.2	アクション・リサーチ「子育て支援ネットワークの構築・運営」	230
18.3	ネットワークの構築・運営を支える実践知	233
18.4	子育て支援ネットワーク活動の中の「共生の社会づくり」	235

第19章 希望としての地域社会——複雑性と共生の可能性	熊本博之
19.1 地域社会における共生	239
19.2 A地区の歴史	241
19.3 A地区の意思決定システム	243
19.4 地域住民の共生に向けて	246
第20章 女性の高学歴化と「社会進出」	笹野悦子
20.1 女性の高学歴化	251
20.2 戦後前期における高学歴女性の「女性化」	252
20.3 戦後前期における高学歴女性の「社会進出」	255
20.4 戦後後期における高学歴女性の社会進出と男女の共生の課題	260
第5部 国民教育をこえて	
第21章 国際教育開発援助とグローバル市民社会	佐藤真理子
21.1 国際教育開発援助アクターからみる「共生」	269
21.2 構造調整プログラムと「政策支援」	271
21.3 基礎教育開発・開発援助の潮流形成	274
21.4 「国家(政治システム)」による基礎教育開発援助戦略	275
21.5 教育開発援助におけるNGO／市民社会	276
21.6 グローバル市民社会の可能性	280
第22章 イングランドのシティズンシップ教育と共生	杉田かおり
22.1 「国民」・「市民」という境界を問う——シティズンシップから考える共生	283
22.2 労働党政権下のシティズンシップ教育政策	286
22.3 共通のシティズンシップと多様性の尊重	291
22.4 希望：共生への契機——シティズンシップを問うこと	292
第23章 キルギス共和国の多言語実践にみる共生	小田桐奈美
23.1 言語と「共生」	295
23.2 キルギス共和国における言語状況の重層性	297
23.3 社会における多言語実践——キルギス語推進とのほざまで	299
23.4 個人における多言語実践	300

23.5	多言語実践と「共生」——複数のコミュニケーション・チャンネルによる関係性	303
第24章 沖縄史をめぐる教育的知識の展開		岡本智周
24.1	学校歴史教育と「共生」	306
24.2	沖縄史に関する教育的知識の推移	308
24.3	沖縄史に関する教育的知識の展開	311
24.4	学校歴史教育における複層的な語り口の可能性	315
第25章 米国の歴史学習にみるコミュニティヒストリーへの取り組み		藤井大亮
25.1	共生へ向けた歴史学習の課題とコミュニティヒストリーの可能性	318
25.2	“Foxfire”プロジェクトの成果とアクター	320
25.3	“Foxfire”プロジェクトにみるコミュニティヒストリーへの取り組み	322
25.4	コミュニティヒストリーを学習する意味	326
提 案		
共生が希望をつむぐために		田中統治・唐木清志・井田仁康
1	希望をつむぐ共生教育のデザインへ	333
2	他者との共生を基盤とする希望社会におけるシティズンシップ教育の挑戦	337
3	自然と共生、そしてESD	341
おわりに		347
索 引		350
執筆者紹介		354